

富山和子 「水の文化」とは何か 第4回

天然ガキをよみがえらせた大造林 パイロット・フォレスト

荒廃した国土から日本人はいかに立ち上がったか

《北海道 ^{しべちゃ}標茶町・^{あっけし}厚岸町》

昭和の大造林

長い歴史と伝統の上に築き上げられてきた日本の「水の文化」その水とのつきあいの知恵や技術が次第に忘れられようとしています。

いま記録に止め、世に伝えておかなければというテーマを選んで取り上げてきたのが、この特集でした。今回お届けするのは、荒れ果てた厳寒の地を緑の沃野に変えた現代の国土緑化「昭和の大造林」の苦闘の物語です。

四代目望楼から望む 現在のパイロット・フォレスト 360°

富山和子「水の文化」とは何か 第4回

漁民の森の元祖

「森林が海の魚を養う」ということをご存知でしょうか。「ああ、海岸の森林と魚の関係か」と思われる方があるかも知れません。が、海岸林と魚の関係なら、後述のように昔から漁民の間では知られ、それは現代の保安林制度にも生かされて、「魚付き保安林」が法律で定められています。

が、今回の場合、海岸の森林ではなく、内陸の森林の話です。例えば上越国境の山々までが、日本海や太平洋の魚を養っている、という話です。

最初この話を世に出したのは、一九七八年、『森は生きている』によってのことでした。当時はだれもがびつくりするような話でしたから、原稿を渡した段階で出版社の校閲部から、「本当か」とチェックが入ったほどでした。

そのあまりの意外性ゆえでしょう。この話を語る人も増え、今では随分知られるようになりました。そして今では、日本の各地に「漁民の森」が育ち始めています。私が世に訴えてきた森林の働きの中で、現代社会がもつとも敏感に反応してくれた機能、それが、この「森林は海の魚を養う」ことだったのです。

しかしながらこの話には、実は元祖がありました。北海道、根釧原野の大造林事業です。人間が入り込むことさえ容易ではないような最北の原野に、戦後、いのちがけで木を植えてきた営林署の人たちの苦闘の歴史です。

その成果が実って、気がついたら海の資源がよみがえっていた。そして、森林が魚や昆布を養うことが証明されたのです。

今でこそ「木を植えよう」とのスローガンがはなやかにうたわれたり、「漁民の森」が脚光を浴びたりしているものの（その実、山村の実状はあまりに厳しいのですが）、そのおもとの元祖については、人知れず歴史に埋もれてしまつ、というのでは余りに残念です。すでに半世紀近くを経過し、当時の現場を知る関係者も数少なくなつて来た現在、その数少ない貴重な経験者にお会いして、話を聞くことに致しました。

荒廃した国土から立ち上がった戦後日本の、国土緑化運動がどのようなものであったか、また、一口に木を植えるといつけれど、それがどのような大変な仕事であったかということに関して、考えさせられる方が少なくないことでしょう。